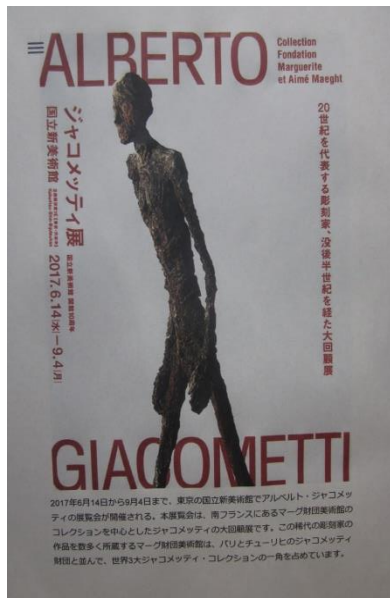


ジャコメッティ展

国立新美術館（東京・六本木） 2017.06.14～09.04

豊田市美術館（愛知県） 2017.10.14～12.24



「アルベルト・ジャコメッティ」(1901～1966)は、スイス生まれのパリで活躍した“20世紀の欧州における最も重要な彫刻家”と称される巨匠である。

本展は、「南フランス・マール財団美術館」の全面的な協力の下で、画伯の初期から晩年までの創造の軌跡をたどるコレクションである彫刻、油彩、素描、版画など「132点の作品」を一堂に展示する企画で、「ジャコメッティ」没後半世紀を経た「大回顧展」として開催されている。

《歩く男Ⅰ》 1960年 ブロンズ 183x26x95.5 cm

人間の本质に迫るため、虚飾を一切取り払って極端に細くなった細長い人物像が特徴である晩年の作品。

《女＝スプーン》 1926/27年 ブロンズ 145x51x21 cm



画伯は1922年にはパリに滞在して、アフリカやオセアニアの造形、新しい芸術様式のキュビスムやシュルレアリスム運動などに感化され、自らの道を模索してこの時代を代表する作品を制作した。

本作品は、アフリカのダン族が用いる擬人化されたスプーンに着想を得たもので、西洋の外から受けた影響が如実に感じられる。

《大きな像 女レオーニ》ブロンズ 1947年
167x19.5x41 cm

画伯は、30年代にはモデルと向き合う制作に回帰し“見えるままに”対象を捉えて造形化するという困難な課題に挑み続けていた。

ちょっとくつろぐ時にもスケッチをしながら絶え間ないデッサンをすることを基本とし、街行く人々の姿を即興的にとらえた素描から、群像形式の彫刻が生まれて肖像画をもとにして、数多くのユニークな大きな彫刻を制作している。